





第十二章 英佛ノ交情ヲ回復スルノ困難

(千八百四十一年ヨリ千八百四十五年ニ至ル)

其ノ一 英佛協商ノ成行

前章ニ記述シタル東方ノ危機ノ為メニ千八百
三十年以來歐洲ノ均勢ヲ保維シ一般ノ平
和ヲ支持シタル英佛二國ノ協商ハ既ニ全ク
破レタリ今ヤ東方ノ危機已ニ收局ヲ告ケタ
ル後ニ於テ其應サニ起ルベキ大問題ハ二國ハ
果シテ其協商ノ約ヲ再訂スルヤ否ヤト言フニ
在リ而シテ二國ガ相共ニ之ヲ再訂スルニ百方
其手段ヲ盡クシタルト其間ニ播マレル各般
ノ事情ガ輒モスレバ二國ヲ牽制シ遂ニ之ヲ
シテ再ニ其協商ヲ遂グルコトヲ得セシメガ

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

リシトハ是レ則チ千八百四十一年ヨリ千八百四十五
年ニ至ル政海ノ外交史ニ於テ最モ注目スベキ事
態ナリトス
仙王ルイドワイリツプハ英王ノ反對ニ遭フテ殆ムド
將ニ其滅亡ヲ招致セムトスルノ窮境ニ陥レリ故
ニ五一方ニ其多年ノ希望ヲ捨テスシテ徐口ニ
懷玉ト左監ヲ訂結スルノ方策ヲ講スルト左時ニ
他方ニハ自玉ト其カラニシテ以テ政海列王ノ間ニ
馳騁スルニ足ルベキ一大強玉ヲ得テ之ト親交ヲ結
バムコトヲ計レリ今夫レ仙王ニテ専ラ懷玉ト親
交ヲ結ブトキハ必ラスヤ其非革命政策ニ悞左
シタル者トシテ玉民ノ非難ヲ免ルコト能ハズ而
シテ是レ實ニルイリツプト首相ギゾトトガ

為スヲ欲セヨル所ナリトス之ニ及シテ今若シ
英王ト俱ニ左監ヲ結フトキハ志ヨリ毫モ以ノ
ルキ嫌疑ヲ招クノ憂アルコトナシ但ダ英王
果シテ仙王ノ望ムガ如ク之ト相親マムト欲セバ
固シク従来の政策ヲ改メテ仙王ノ新内閣ト
拘シク平和的保守ノ方策ニ由ラザルヘカラズ
故ニ若シハルナルストンニシテ永ク英王ノ政柄
ヲ抱持セムニハ仙王政府ノ希望セルカ如ク再
ビ英王ノ交情ヲ温ムルコトハ遂ニ得テ望ム
ベカラザルナリ然レドモ海峡条約訂結ノ後
千数月英王於テ施行セル總選舉ノ結果ハ
保守党ニ大多數ヲ賦ヘナルボルヌ内閣ハ千
八百四十一年八月三十日ヲ以テ悉ク其職ヲ退キ

九月三日 新内閣ノ組織ナリテ ロベルト・ピールハ之
レガ首相ニ任シ アベルデーン卿ハ其外務大臣トナ
レリ而シテ 卿ハ人トナリ 溫柔ニシテ 頗ル 調和的
精神ニ富ミ 就職ノ始メヨリ 務メテ 英仏間ノ 同
交ヲ 温メムト 欲スルノ 意アリ 若シ夫レ 首相ト
ルニ至リテハ 未タ 大ニ 仏玉ニ 對シテ 好意ヲ
表セリト 言フコト 能ハザルモ 而モ 前内閣ガ
佛玉ニ 對シ 事コトニ 猜忌ヲ 挟ミ 凌辱ヲ 加ヘタ
ルヲ 非トシテ 其態度ヲ 一變セント 欲スルノ 意
ナキニ アラズ 要スルニ 英仏ニ 玉ノ 政府ハ 對シク
保守ノ 政策ヲ 執リ 齊シク 内外ノ 不和ヲ 維持ス
ルニ 熱心ナルヲ 以テ 百事ニ 就キテ 煥帝ヲ 遂クルハ
極メテ 易ルタル者ニ 似タリ 況ンヤ 英玉政府ハ

相俱ニ 誠心 誠意ニ 日甚日ノ 協商ヲ 回復セムコト
ヲ 希望シタルニ 於テ ヤ 然レドモ 外來ノ 事情ハ
屬、兩玉政府ヲ 牽制シ之ヲ 遂ニ 其希望
ヲ 達スル 能ハザラシメタリ 今夫レ 英仏ニ 玉ガ 再ビ
其親交ヲ 修ムルハ 亦 政ニ 玉ノ 最モ 不利トスル所故
ニ 三五ハ 百方 手段ヲ 竭クシテ 之ヲ 妨害セムト 欲シ
而シテ 當時 英玉ノ 王室ト 仏玉ノ 王室ト 間ガ 各
自ニ 懷抱セル 企圖ハ 其ノ 相容レザル 氷炭 帝ダナラ
ナル者アリテ 其 衝突ハ 強キテ 亦 政府ノ 協商ニ 至大
ノ 障礙ヲ 與ヘザルベカラズ 加フルニ 當時 英仏ニ 玉
ハ 右ノ 方面ニ 於テ 其 利害ノ 衝突セル者アリテ 是
亦 二玉ノ 親交ヲ 妨クルノ 一 大難 関タラヌムバ アラ
ズ 然レドモ 此等ノ 事ヲ 外ニシテ 更ニ 英玉ノ 文

情ヲ疏隔スルノ最モ大ナル者ハ西玉ノ人民交々
猜疑ノ念ヲ懷キテ相信スルコトナリ而シテ
最近ノ事変ハ一層其猜疑ノ念ヲ熾ヤラ
シメ有玉外交家ノ志靜ノ心巧慧ノ才ヲ
以テスルモ遂ニ之ヲ釋然タラシムルコト能ハ
ザルノ一事ニシテ當時有玉氏ハ交々劔ヲ按
シテ睥睨シ毫モ相下ルノ意ナリ英玉氏ハ仏
西ニ好情ヲ尽リヌヲ以テ是レ其欺騙ニ罹ル
所以ナリトナシ仏西氏ハ驟カタリトモ英玉
讓歩スルヲ以テ卑劣耻ナキノ行ナリト思科
セリ

其二 千八百四十一年及び千八百四十二年
ニ於ケル搜查権問題

仏國王ルイト・フイリッブ及び首相ギゾーハ其
玉氏ノ意向斯ノ如クナルヲ察シズ千八百
四十一年ノ終ニ方リ奴隸賣買ノ禁止ニ関
シテ英玉ト俱ニ一ノ條約ヲ訂結シ以テ其權
心ヲ求ムルニ切ナルノ意ヲ表セムコトヲ計
レリ意フニ此條約タル若シ平時ニ於テ之ヲ訂
結セムニハ樂論ハ必ス之ニ向テ非難ヲ加フル
コトアラザリシナルベシ然レドモ當時、玉
民ハ相疑フテ大ニ其非ヲ鳴ラシ弟ニ政府ヲ
シテ中途ニシテ之ヲ廢棄スルノ已ムコトヲ
得ガルニ至ラシナリ是ヨリ先キ英玉政府
ガ其博愛心ト其利己心トニ存キテ多
年黒奴ノ賣買ヲ廢止シテ在居シタルハ

夫人ノ治リ知ル所ニシテ英西諸君ハ此ノ事
ニ一疾スル維納會議ノ宣言ヲ有効ナラシ
ムルガ爲メ有る事界ノ重ナル海軍ト具ニ議
ヲ論キ里奴臺閣ノ中心ナル阿非利加ノ海
峯ニ嚴密ナル監視ヲ施コソコトヲ要求
セリ而シテ其所謂監視ハ主トシテ里奴ヲ擬
送スルノ嫌疑アル船祇ヲ當レテ捜査ヲ施
スニ在リ此事ニ就キ地中海中ノ二島玉ハ既
ニ英西ノ要求ヲ受レ而シテ仏玉モ亦互ニ覆
蓋議ヲ禍シタル後チ遂ニ英西ノ提議ニ順
賛ヲ與ヘタリ蓋シ此時ハ千八百三十年ヲ距ル
コトをカラズレテ仏玉ノ新政府ハ專ラ英西
権心ヲ収メテ之ト俱ニ合盟ヲ結ハムト欲シ復

々他事ヲ顧ミルニ暇ナキノ秋ナリシナリ是ニ
於テ千八百三十一年十一月三十日及千八百三十三年
三月二十二日ニ二條ノ條約成リテ英仏二
國ハ阿非利加ノ海中其各モ監視ヲ要
スル区域内ニ於テ互ニ捜査ヲ行フノ權利ヲ保
有スル者トシ仍テ其權利ノ執行ニ與スル
規則ヲ設定シ而シテ其捜査ニ用ラル英
西ノ巡邏艦艦ハ其數仏玉ノ巡邏艦ニ倍ス
ルコトヲ得ベシト定メタリ然レドモ當時ニ
在テハ英西海軍ニ此ノ如ク偏重ノ利益ヲ
與ヘタルガ爲メ仏玉人民中ニ於テ敢テ異
論ヲ唱フル者アラザリシガ千八百四十一年ノ
十二月二十日ノ條約ニ至リテハ之ト大ニ殊ヲ異

ニセリ蓋シ 英法条約ハ 數年前ヨリ 倫敦ニ於テ
改定ノ 五大玉間ニ 既ニ 其 終末ヲ 再始シ 予ハ
不四十年ニ 於ケル 東方ノ 危機ノ 爲メ 一旦之ヲ 中
止シタル 者ニシテ 其 極旨ハ 從來 甚ダ 不完全ナ
リシ 黒奴 賣買ノ 禁止ヲ 確實ナラシムルガ 爲メ
更ニ 其 搜查ノ 区域ヲ 擴張シテ 政求 亞大陸ノ 海
峽ニ 及ボシ 且其 巡邏 疆ノ 數ニ 突シテ 前キ
ニ 華玉ノ 定メタル 制限ヲ 解クベシト 言フニ
在リ 露 俄 普ノ 三玉ハ 此問題ニ 就キテ 其 利
害ノ 關係 極メテ 稀ナルヲ 以テ 交易ク 華玉
ノ 要求ニ 應シ而シテ 仏 西 政府ハ 之ヲ 以テ 華玉
政府ノ 歡心ヲ 買フノ 好 標價ナリト 思料シ 且
新タニ 五大玉ノ 間ニ 成レル 條約ニ 申テ 仏 西ガ

真徳ニ 改定ノ 共同ニ 加入シタルヲ 証明スルニ 且
ルベシト ナシ 直ニ 之ニ 調子ヲ 禁フベキヲ 諾シ
タリ

然レドモ 仏 西ノ 憲法ハ 政府カ 新條約ニ 由リ
テ カナテ 英玉ノ 歡心ヲ 取ラトスルヲ 非トシ之
ヲ 以テ 眞玉ノ 權利ヲ 屈シ 俾面ニ 辱ムル者ナリ
トナシ 或ハ 議院ニ 或ハ 新 憲法ニ 之ヲ 攻撃シテ
餘カヲ 遺サズ 予ハ 百四十二年一月ニ 至リテ 代
議院ハ 遂ニ 公 開ニ 議場ニ 於テ 新條約ニ 批准
ヲ 與フルコトヲ 否決シタリ 故ヲ 以テ 翌二月十
九日 倫敦ニ 於テ 新條約ノ 批准ヲ 交換スルノ
期日ニ 至リテ 仏 國政府ハ 更ニ 之レガ 延期ヲ 請
求シ 之レガ 爲メ 大ニ 英玉政府ノ 不満ヲ 買ヘリ

是、時、方、リ、小、政、ノ、三、玉、ハ、既、ニ、新、條、約、ノ、批
准、ヲ、終、リ、タ、ル、モ、独、リ、他、國、ノ、之、ニ、批、准、ヲ、與、フ
ル、ヲ、強、キ、テ、未、タ、決、断、ス、ハ、収、局、ヲ、告、グ、ル、ニ、至、リ、
ス、英、王、政、府、ガ、卒、然、他、玉、ノ、延、明、ヲ、請、求、ニ、據、
シ、テ、大、ニ、之、ヲ、憤、懣、シ、ハ、良、ト、ニ、其、以、テ、ク、ム、バ、ア
ラ、ズ、當、時、ル、イ、リ、フ、イ、リ、ツ、ア、及、ビ、其、閣、員、等、ハ、時、日
ヲ、経、ル、ニ、從、フ、テ、王、中、ノ、人、心、漸、ク、靜、穩、ニ、收、シ、其、
政、策、ニ、反、對、ス、ル、ノ、熱、度、亦、漸、ク、冷、却、ス、ル、ニ、至、ル、
ベ、シ、ト、恩、料、シ、且、ツ、七、月、八、代、議、院、ノ、總、選、舉、期、
ニ、際、ス、ル、ヲ、以、テ、新、議、會、ニ、於、テ、ハ、必、ラ、ス、多、數、ノ、
假、賛、ヲ、得、ベ、シ、ト、信、シ、タ、リ、然、レ、ド、モ、新、議、會、
於、テ、ハ、反、令、ヒ、保、守、黨、多、數、ヲ、制、シ、テ、其、全、體、ノ、
政、策、ニ、執、キ、テ、ハ、接、ヲ、ギ、ゾ、ト、ニ、假、ス、コ、ト、ア、ル、ベ、シ、ト

ス、ル、モ、其、英、王、ノ、崇、ス、ル、政、策、ニ、假、賛、ヲ、與、フ、ル、
ガ、如、キ、ハ、到、底、得、テ、望、ム、ヘ、カ、ラ、ズ、之、ニ、加、フ、ル、ニ、
王、ノ、赤、子、オ、ル、レ、ア、ン、公、ハ、七、月、十、三、日、三、十、二、歳、ノ、幼、
齡、ヲ、以、テ、病、ミ、テ、歿、シ、代、リ、テ、王、位、ヲ、紹、リ、ベ、キ、
モ、ノ、ハ、公、ノ、遺、子、其、齒、總、カ、ニ、四、年、十、ル、ア、リ、而、
シ、テ、其、未、ダ、丁、年、ニ、達、セ、ス、シ、テ、位、ニ、即、キ、ニ、堪、
ニ、於、テ、知、主、ヲ、佐、ケ、テ、攝、政、ノ、職、ニ、任、ズ、ヘ、キ、
ス、ル、ル、公、ノ、痛、ク、王、氏、ノ、間、ニ、人、望、ヲ、失、ヘ、ル、ア、
リ、見、ル、ヘ、シ、當、時、他、玉、政、府、ガ、王、氏、ノ、怒、ヲ、
犯、シ、強、テ、其、欲、セ、サ、ル、條、約、ヲ、強、持、ス、ル、ノ、力、ナ、
キ、コ、ト、ヲ、故、ニ、千、八、百、四、十、二、年、十、一、月、九、日、他、玉、
政、府、ノ、要、求、ニ、由、リ、テ、新、條、約、訂、結、ノ、談判、
ハ、遂、ニ、不、調、ニ、決、シ、英、國、政、府、ハ、佛、王、ノ、措、置

ヲ以テ自國ニ辱ヲ與ヘタル者トシテ深ク之
ヲ憤ホリ加フルニ其翌千八百四十三年一月
佛國議院ニ於テギゾーハ議員ノ迫ル所トナ
リテ千八百三十一年及ビ千八百三十三年ノ兩
條約亦之ヲ廢棄スヘキ旨ヲ約シタルノ報
アリ英西政府ノ佛西ニ答スル憤懣ハ益々
深ク且ツ大ナルヲ加ヘタリ

其三 佛白二國ノ間ニ於ケル関稅左盟
ノ失敗

前記ノ如ク佛國政府ハ痛ク英國ノ感情ヲ
害シタルヲ以テ英國政府モ亦存リニ仏西
ノ改革ニ妨害ヲ加ヘテ以テ自ラ快トスルニ至
レリ是ノ時ニ方リ佛西政府ハ白耳義ト言

議シテ彼ノ日耳曼聯邦ノ間ニ存立スル者
ト略ボ其趣ヲ同リセル関稅左盟ヲ兩國ノ
間ニ訂結スルノ企アリ是レヨリ先キ千八百三
十三年普國ノ提案ニ由リテ成立セル日耳曼
聯邦ノ関稅左盟ハ千八百四十一年ニ至リテ之ヲ
再訂シ、ガ新條約ハ一層其左盟ノ運用ヲ圖
滑ナラシメ一層其関稅ノ收入ヲ多大ナラシ
メ加フルニ新夕ニ諸外國ト訂結セル通商條
約ニ由リテ大ニ其左盟ノ基本ヲ固定シ之ヲシ
テ歐洲列西ノ間ニ絶大ノ勢力ヲ振フコトヲ得セ
シメタリ而シテ其餘威施キテ自耳義ニ及ボ
シ自耳義ハ其左盟ノ勢力ニ壓倒セラレテ曠
ニ吾產ノ販路ヲ失フニ至レリ是ニ於テ自耳義

政府ハ仏玉ト俱ニ関稅左監對抗シ以テ其段
盛ナル工業品ノ販路ヲ佛玉内ニ開カント欲シ仏玉
政府モ亦悦ビテ其需ニ應シタルヲ以テ其玉
間ニ交易ク協定ヲ遂ケテ彼此相俱ニ便益アル
左監條約ノ成ルハ將ニ近キアラムトスルノ觀
アリ然ルニ千八百四十二年ノ終末ニ至リテ英玉
政府ハ亦其玉内ノ樂諦ニ迫ラレテ仏玉ノ英
稅左監ニ異議ヲ唱ヘ乃チ其由ヲ 仏玉政府ニ通
牒セリ其言曰ク 白屏義ハ永久中立ノ玉ナリ
今一等玉ニシテ之ト俱ニ英稅左監ヲ結ブハ其
實ニ之ヲ屬領トナスニ均シク其身義ハ事實ニ於
テ其獨立ヲ失フテ條約ノ精神ハ全ク無効ニ
屬スベシ 而シテ小政ノ三玉モ亦英玉ノ讓引ニ

應シ其主張ヲ助ケテ交々 仏玉政府ヲ詰責
セリ 仏玉政府ハ之ニ對シテ 普玉ガ業因以テ
ニ於テ既ニ為スコトヲ得タルモノニシテ 仏玉獨
リ業因以南ニ於テ之ヲ為ス能ハザルノ理ナキ
ヲ抗辯シ、モ到底實力ニ於テ回玉ニ對抗スル
能ハザルヲ以テ務ニ遂ニ之ニ屈服セザルベカラ
ズ加フルニ其左監業ハ玉内ニ於テモ 獨ニ其福ヲ
唱フル者ナキニアラザルニ ギゾーハ姑ク其企ヲ
中止スルニ若カズト思料シ子ハ至四十二年以後
ハ再ビ之ニ言及スルコトアラザリキ
英玉政府ハ既ニ十二月二十日ノ條約ヲ抛棄シ而
シテ 仏玉政府モ亦仏玉ノ英稅左監ヲ斷念
シテニ其交々 英大ノ讓歩ヲ為セリ而モ 阿ベル

ゲーン及びギゾーノ北界論セル英仏ニ至リ候者ハ
ホクハテオウセルヲ認ムベカラズ蓋シ此二人ハ他
人トシテハ其意氣頗ル相投合セリト雖ドモ
其互ノ利害ハ各所ノ方面ニ於テ相乖背地
スルコト常ニ上文ニ記述シタル者ノミニアラズ
而シテ二人俱ニ人ト爲リ方違ヒシテお給クテ欲
ゼサルヲ以テ其政策ハ勢ニお衝突スル所ナ
カルベカラズ

頁四 西班牙ニ於ケル英仏ニ至リ陰謀

更ニ英仏ニ至リ陽謀シテ其お合スルヲ許サ、
ル重要ナル問題アリ西班牙問題是レナリ英仏
ガ夙トニ葡萄牙ニ於テ占有シタル勢力ヲ擴
メテ之ヲイベリツク事益ノ金額ニ及ボカント

スルハ多年ノ宿志ナリ然レドモ西班牙ニ於テハ
其勢力常ニ仏至ノ勢力ニ衝突シテ未ダ大
ニ其志ヲ逞クスル能ハス而シテ仏至ハ僅キニル
一、フイリツプノ失錯ノおナニマドリッドニ於テ一旦其
勢力ヲ失墜セリト雖ドモ今ヤ再び昔日ノ地
位ヲ回復シテ其勢ニ英至ヲ壓倒スルニ至レリ
始メ 正スパルテローハ英至ノ庇保ニ由リ母后マリ
ー、クステヤンヌヲ逐フテ幼主イザベールヲ擁シ子ハ
百四十一年五月八日遂ニ自ら撰政トナレリ彼
レハ元來進歩党ヲ代表スル者ナリト雖モアベ
ルゲーン 頗ル其全カラ獨リシテ之ヲ援クコト依
然トシテ パルメルストンノ時ニ異ナラズ且ツ徐ニ
之ヲ擁フテ保守的政策ニ傾カシメムト欲シ

又其援助ヲ與フルノ被斃トシテ西班牙政府
シシテ許多ノ讓與ヲ為シメタリ之ニ及シテ
仏王政府ハ百方針ヲ遣ラシテエスパルテロー
ヲ
顛覆セムト欲シマリ、クリスチヤニスハ巴里ニ
来リテ伯父ルイ、フィリップノ為メニ極メテ優
渥ナル待遇ヲ受ケエスパルテローガ英王ノ保護
ニ申テ幼主イザベルヲ同耳曼朕内ノ一公子ニ
妻ハオムト欲スルニ及シマリ、クリスチヤニスハ之ヲル
イ、フィリップノ弟王子オーマール公ニ妻ハオムコト
ヲ求メタリ右ノムクナルヲ以テ仏王ノ王室ハ百方
力ヲ竭クシテマリ、クリスチヤンガエスパルテローヲ顛
覆セムトスル陰謀ヲ扶ケ子八百四十年九月
及び十月ヲ以テ西班牙ニ起リタル二回ノ叛乱ハ實ニ

巴里ニ於テ之ガ設備ヲ為セルモノナリ而シテ此
ノ間仏王政府ハ英王ノ歡心ヲ収ムルガ爲メ金
大使ヲマドリッドニ派遣シタルモ子八百四十二
年ニ至リ其ビ之ヲ召還セリ是ヨリ後チマリ、
クリスチヤニスノ党派ハ累リニ陰謀ヲ運ラシ
テ企ダテ、エスパルテローヲ顛覆セムト欲シ急激
シ英王ニ對シ屈從ヲ肯トスルヲ視テ漸ク之ニ
反對ノ色ヲ顯ハシ子八百四十二年ノ末ニハル
スロースニ托リタル叛乱ハ死屍算ヲ乱ダ
シ流血杆ヲ漂ハシ辛ラシテ之ヲ鎮壓スルヲ
得タリ劣ヒ是ノ如クナルヲ以テ往キニドン、
カルローノ党派ヲ征服シタル功ニ由リテ其王

人ヨリ鬼神ノ如ク畏敬セラレタル
令ヤ頓ニ其人望ヲ失ヒ予八百四十三年一月ニ
議會ノ反對、**猛列ナルニ勝ヘス**シテ之ヲ解散シ、
ガ新議會モ亦痛ク其政策反對ヲ表シタルヲ
以テ五月二十六日再ヒ之ヲ解散セリ是ニ於テ
全西班牙ノ人民ハ奇シク起リテ **エスバルテローニ**
反抗シ、**マリクリスチヤヌ**ノ腹臣ノ將軍ナル**ヴエ**
ハ巴里ヨリ急ニ馳セテ西班牙ニ赴キ **エスバルテ**
ローガ出テ、**アングルージー**ノ叛徒ヲ征討セルニ
乘シテ**マドリッド**ニ入り更ニ兵ヲ發シテ其背後
ヲ擣キテ大ニ之ヲ破フリ七月二十九日 **エスバルテ**
引ハ遂ニ海ニ脱シテ英王ニ逃走セリ以上ノ
事變ハ佛王ノ為メニ固ヨリ一個ノ勝利タル

ヲ失ハズ然レドモ佛國ガ其勝利ヲ伐ルコト愈
ニ大ナレバ其英國ノ怒ヲ買フコト亦愈ニ大ナ
ラサルベカラズ

其五 **ルイト、フイリッ**ノ殖民政策ノ
之ト同時ニ英國ハ佛國ノ殖民政策ノ漸ク諸
般ノ障礙ヲ排除シテ着々實効ヲ奏シ而シテ
自國ノ殖民政策ハ之ニ反シテ輒モスレハ困頓
蹉跌ノ状アルヲ免レザルヲ視テ益々佛國ニ對ス
ル嫉妬ノ念ヲ深クセリ蓋シ英王ハ是ヨリ先キ
千八百四十二年八月二十九日、**廣東條約**ニ由リ
支那ニ於テ多クノ利益ヲ得セザリシニアラズ
然レドモ之レガ病メニ二年ノ久シキニ亘レル
戦役ヲ起コシテ其失フ所亦甚ダ寡シトセズ

而シテ他方ニ於テハ彼レハ阿業尼士坦ヲ經略
シテ之ヲ印度ノ藩屏トナシ以テ中央亞細亞ニ於
ケル露西ノ南下防カムト欲シタルモ千八百四十二
年一月又亞征軍ハ大ニ土兵ノ破フル所トナリ尔
後幸ラシテ又敗衄ノ辱ヲ雪クコトヲ得タルモ
遂ニ又占領ノ目的ヲ達スルコト能ハガリキ然
ルニ仏西ニ之ト大ニ交際ヲ奏セガルコトナリ子ハ
畫スル所ハ着ルニ又効ヲ奏セガルコトナリ子ハ
不四十二年破レハナイオット及ビノシトベノ二
島ヲ略取シテマダカスカールノ咽喉ヲ扼シ又阿
非利加ノ西海岸ニ「グランベッサン」「アシニ」「ガボン」
等ノ陸地ヲ設置シ太平洋ニ於テハ「マルキーズ」
島ヲ得テ之ヲ其海軍碇繋所ニ充テソシテ

島ヲ以テ又保護トナセリ然レドモ此等ノ事
ハ又利害ノ突スル所尚ホ甚ダ切実ナラガレヨ
テ英西モ亦仏西ノ所ヲ認セガレニアラズ
獨リ又冷眼ニ看スル能ハガレ者ハ珍シ
ノ視テ以テ能ク病スニ足ラストナセルアルゼリ
經略ガ強ムド在リ又成功ヲ告クルニ至レルコト
是レナリ蓋シ仏西政府ハ当初ハ英西ノ豫カル所
アリテ敢テ大ニアルゼリノ經略ニ力ヲ用ユ
ルコトナリ茲ニ英西ノ軍月ヲ經過シガ子ハ
百四十年東方ノ危機ニ際シ仏西ハ復タ英
西ヲ豫カルノ要ナキヲ以テ其始メテ又全力ヲ
アルゼリノ經略ニ傾注シ將軍ビュジョーハ新
タニ總督ニ任シテ數萬ノ大兵ヲ擡ケラレ子ハ

百四十一年大舉シテ亞拉比人ノ勦討ニ着手セリ
是ニ於テアブデルカデーハ仏軍ノ為メニ諸方
ヨリ合撃セラレテ其翌千八百四十二年逃レテ
馬刺加ニ走り商來更ニ左國及英國ノ援
助ヲ得テ來リテ佛軍ヲ侵セリト雖ドモ千
八百四十三年五月十六日オスマール公ノ為メ
ニスマラーヲ陷ヒレラレ更ニ各地ノ戰ニ於
テ屢々敗衄ヲ取レル後テ竟ニ再ヒアルゼリー
ノ疆土外ニ逃走セリ是ニ於テ國ヲ舉ケテ仏
國ノ威令ニ服シ其勢力ハ延キテチユニスニ
及ホシ其國主ハ土耳其格ノ抗議ヲ顧ミズシテ
仏國ノ保護ヲ變ケムコトヲ請求セリ次ヒテ
仏國ハ馬刺加ガ多年アブデルカデーヲ庇

北護シテ仏國軍ニ抵抗シタルノ罪ヲ鳴ラ
サムト欲シ而シテ英國ハ仏國ノ戰勝ヲ悞
ミ陰カニモラツクヲ援ケテ仏國ニ抗セシメ
以テ真アルゼリーニ於ケル戰爭ノ曠日彌
久ナラムコトヲ希望セリ

其六 西班牙及ビ希臘ニ於ケル佛國外
交ノ成功

當時ピール内閣ハ内政ニ於テ大ニ困難ヲ極メ
其仏國ト絶ツノ得策ニアラサルヲ慮カリ
仏國ヲシテ少シク讓歩スル所ヲラシメ以テ英
國人民ノ仏國ニ對スル猜疑心ヲ永釋セム
ト欲シ千八百四十三年九月上旬女王ヴィクト
リアハ仏王ルイ・フィリップヲ訪問シ仍テ之

ヲ據トシテ兩國ノ協商ヲ遂ケムコトヲ計
レリ。グイクトリヤノ 仏王ニ到ルヤルイーブイリヤ
ハ之ヲウリ宮ニ種シテ大ニ之ヲ 欵待シテ
相傳、歡ヲ罄クシテ一点ノ女意アルコトナ
ク人ヲシテ英仏ノ間其交情ノ親密ナル漆
膠膏ナラサルノ思アラシメタリ。然レドモ女
王ニ電^意從シテウリ宮ニ來レル英王外務大
臣アベルダイン卿ハ屢次佛國首相ギゾット
會見見シニギゾーハ唯ダ甘言ヲ以テ其他意
ナキヲ反覆セルノミ。又於 話ハ漢トシテ一モ要
願ヲ得ルモノアラサリキ是、故ニ仏王政府ハ
果シテ黒奴賣買ノ禁止ニ策スル子八百三十
一年及ヒ子八百三十三年ノ各條約ヲ廢止スル

ノ意見ヲ放却シ、ヤ否ヤルイーブイリツプハ復
タ其努力ヲ西班牙ニ擴張スルヲ 意ナキヤ否ヤ
仏王ニ敬テ馬刺加ノ罪ヲ問フコトアラサル
ヤ否ヤ。凡ソ此等ノ問題ハ則チ此會見ニ於
テアベルダイン卿ガ切ニ其解 答ヲ得ムト欲シ
タル者ニシテ而シテギゾーガ務メテソニ明白
ノ答ヲ為スコトヲ 避ケ遂ニ以テ英政府ノ疑
ヲ釋シコト能ハザリシ所ノモノナリ
之ヲ要スルニウリ 王ノ會見ハ遂ニ英王政府
ノ期望ヲ満足スルコト能ハザリシマ 救ヲ為
レズ。故ヲ以テ英王政府ハ今尚ホ 仏王ニ對シテ
嫌焉タルコト能ハズ。其年十一月ニ前キノ
仏王シャルル十世、 健嗣ボルドームガ シャンポール

伯下偽名シテ倫敦ニ来リ其党派ノ領袖ヲ
クウヴ公團ニ招集シ仏王政府ニ告シテ示威約大
運勅ヲ岸以セルヲ黙秘シ敢テ之ヲ告止スルコト
アラザリキ而シテルイー、フイリップスハ此事ニ就キ
テ深ク華王政府ノ外交上ノ禮節ヲ重ムセ
ザルヲ憤ホリ其思慮ノ慎重ナル由ヲ
シク之ヲ嘗嘗際ヲ怒リテ敢テセザルモ而モ是
ヨリ後子其好意ヲ英王ニ表スルコト日暮日ノ
ぬリナルニ至ラズ之ニ當シテ在リ自旁ノ利益ヲ
主張シテ敢テ一步モ退讓スルコトアラザリ
キ
右ノ如クナルヲ以テ仏王政府ハ後年華王ニ懐ル所
アリテ其好意ヲ禁止スル子ハ百三十年

及ビ子ハ百三十年ノ条約ニ異議ヲ唱ルコト
ヲ敢テセザリシガ愛ニ對シテ意ニ公然之ヲ更
新スルノ要求ヲ提出セリアベルチン卿ハ此要求
ニ接シテ内心歎ル仏王ノ暴漫ヲ憤ホルト雖ド
モ敢テ之ヲ免レ孤ハ奴コトアラザリシガ始メ
ヨリ仏王ト親交ヲ結フニ熱心ナラザル首相ロ
ベルト、ピールハ之ヲ聞キテ大ニ不満ノ念ヲ起ハセ
リ而モ佛王政府ノ為スル兵ハ之ニ止コラスシテ更
ニ大ニ英王ノ怒ヲ招致シタル者一ニシテ是レ
リトセバ例セハ西班牙ニ於テ佛王ノ君臣ハ子
ハ百四十二年十一月ノ交ニカルヴ王ヲ援ケ
テ急激光ノオルガガ内閣ヲ覆ヘシ次ヒテ西
班牙政府ヲシテマリー、リスチヤンヌヲ王ニ逐ヘシメ

竟ニ全ク英王党ヲ撲滅セルガ如キハ是レソ
ノ最モ較著ナル者ナリ當時アベルデーシ卿
ハ佛王政府ニ通牒シテ若シ暫時マリイクリスチ
ヤニスヲ抑留シテ國ニ還ラシムルコトナクムバ
大ニ佛國ヲ德トスベキヲ告ゲタリシモ佛王政
府ノ聽リ取ラズマリアリクリスチヤニスハ千八百四
十四年二月ヲ以テ巴里ヲ發シ其翌月マドリウド
ニ達シ四月ニハ其身ヲ王ニ送リタル ゴンガレリ ヲ
ラヴオリ内閣が革命主義ニ偏スルヲ厭フテ
之ヲ顛覆シ終ニナルヴエズヲ擧ケテ其王政ヲ
總理セシメタリナルヴエズハ其就職ノ始メヨ
リ先ツ二德ノ目約ヲ定メテ之ヲ実行セムコト
ヲ期セリ所謂ルニ德ノ目約トハ他ナシ英

王ノ旨ヲ承ケテ制定セル千八百三十七年ノ
憲法ヲ改正シテ極端ナル保守主義ニ率由セ
シムルコト是レ其ナリ速ニ女王イザベール及ビ
其妹ルイゾズ、フエルナンドヲ佛王政府ノ希望ス
ル者ニ妻ハスコト是レ其ノナリ夫レ妹ノ如ク
英王ハ西班牙ニ於テ全ク其勢力ヲ仏王ニ奪
ハレ而シテ轉シテ歐洲ノ他ノ方面ヲ視レハ亦均
シク仏王ノ妨害スル所トナリテ大ニソノ聲望
ヲ失ヘリ是レヨリ先キ希臘ハ千八百三十三年
ヲ以テ新タニバグイエールノオトン公ヲ選ミテ
王位ニ即カシメタルモ尚ホ未ダ憲法ヲ有スル
ニ至ラザリシガオトン王ハ專斷ノ政ヲ好ミテ
敢テ議院制及ヲ其王ニ布クコトヲ欲セズ之

レガ為メ大ニ吾人ノ怒ヲ買ヒ千八百四十三年九月
十五日兵士人民相合シテ亂ヲ起シ吾ニ逐リテ議
院制ヲ設クルコトヲ約セシメタリ此ノ變亂タ
ル英國墜カニ之ヲ煽動シ佛玉之ニ及勞ヲ表シ
露玉モ亦之ヲ喜バザル者ニシテ始メハ英玉独
リ希臘ニ於テ勢カヲ専ラニスルノ觀ヲ呈レ
翌千八百四十四年三月新憲法ヲ施行スルニ及
ビテ英國黨ノ首領マヴロコルダトリーナル者希臘
ノ西政ヲ總攬セリト徒ドモ其後十日ナラズ
シテ仏玉黨ノ首領ニシテ獨立戰爭以テ大ニ
吾人ノ望ミシヲ得タルコレクスハ巴里ヨリ歸本ニ
仏玉公使ピスカトリート謀リテマヴロコダトリーヲ
攻撃シ左辭八月遂ニ之ヲ覆ヘシテ代リテ新

内閣ノ組織レ尙事英玉政府ガ極力之ヲ排斥
スルニ係ハラス死ニ至ハマテ其職ニ留マレリ
其七 馬刺加及ビタイチー事件
仏玉唯ダニ其西班牙及ヒ希臘ニ於ケル外交
ノ成功ニ寄リテ怒ヲ英玉ニ買ヘルノミナラズ
更ニ其阿非利加ニ於ケル戦勝ニ寄リテ英玉
怒ヲ深クセリ始メ仏玉政府ハ務メテ英玉ト
醫房際ヲ啟リコトナカラムト欲シ馬刺加政府
ヨリ屢ニ無禮ヲ加ヘリト徒ドモ敢テ兵ヲ發シ
テ之ヲ討伐スル意思ナリ又其疆土ノ全數若ク
ハ一割分ヲ征略スルノ意アラザリキ然レドモ
苟モ彼レヨリ就襲フ所トナレハ宜シク之ニ應戰
シテ其玉旗ヲ辱ムルナカラムコトヲ明セザル

ヘガラズ然ルニ千八百四十四年ノ春ニ至リ馬刺
加國民ハアブデルカデーノ煽動スル所トナリ公
然兵ヲ擧ケテ佛軍ヲ攻撃セムト欲シ而シテ
其國主 ミエリーアブデルラマン ハ若シ此ノ潮流ニ反
抗スルトキハ自ラ其位ヲ失フニ至ラムコトヲ恐
レテ遂ニ其兵ヲ進ムルニ決シ五月三十日馬刺加
ノ兵ハ来リテ ラーニマグルニヤリニ在ル佛軍ノ先
衛ヲ侵シ其撃退スル所トナレリ是ニ於テ佛
國政府ハ久シク躊躇シテ其辱ヲ甘受スヘキニ
アラス而モ猶ホ宕場ニ戦端ヲ開クヲ欲セズ
シテ一方ニハ大将 ビュジョーヲシテ其部下ノ陸
兵ヲ夥シク馬刺加ノ邊境ニ集中セシムル
ト至時ニジヨアングイル公ヲシテ強大ナル艦

隊ヲ引ヒテ七月九日来リテタンゼー港ニ到リ
馬刺加王ニ最後ノ促答状ヲ送ラシメタリ然
レドモ其要求スル條件頗ル温和ナリシ為メ
馬刺加王ハ適ニ其暴慢ノ心ヲ長シテ決然一々
月ニ彌リテ遂ニ安スルコトアラザリキ是ニ於
テ佛國軍ハ海陸並ビ進ミテ之ヲ攻撃スルニ
決シ八月六日シヨアングイル公ハタンゼーノ城壘ヲ
砲撃シ十五日ニハ更ニ擣シテ モガドールノ城壘ヲ
砲撃シ而シテ其間 ビュジョーハイスリー 河岸ニ於
テ於テ馬刺加ノ兵ヲ撃テ大ニ之ヲ破レリ而シ
テ是レ實ニ此戦役ニ於ケル陸海兩軍ノ偉績
ニシテ佛國ノ武威ヲ中外ニ宣揚セシモノナリ
然レドモ巴里ニ於テハ人皆競フテ馬刺加

遠征軍ノ奇功ヲ稱賛シテ嘖々禁セサルト
左時ニ倫衆ニ於テハ官民齊シク佛國ノ戰功
ヲ媚ミテ益々怒ヲ重ニスルニ至レリ但ダ英國ハ
佛國ニ劣シテ何カニ不満ノ念ヲ抱ケリト雖ドモ
馬刺加事件ニ就キテ一モ佛王ト爭端ヲ啟ク
ノ辭柄ヲ有セズ佛國政府ハ敢テ自ラ進ミテ馬
刺加ヲ攻撃セルニアラズ唯ダ之ニ對シテ正當
ナル復讐言ヲ為セルノミ彼レハ始メヨリ馬刺
加ヲ征略スルノ意ナキノミナラスジヨアンダイル
公ハ敢テタンゼームスハモガドールヲ占領スルコ
トヲスラ為寸ズ而シテ大將ビュジョーモ亦其ノ
大勝ニ拍ハラス敢テ馬刺加ノ内地ニ侵入スルコト
ヲ為サ、リシヲ以テ今若シ英王政府ニシテ仏

王ニ劣シテ可怒ヲ洩サムト欲セバ宜シク他ニ
適當ノ辭柄ヲ設ケザルベカラズ恰モ好シ當時
ニ西ノ間ニ外交上ノ一紛議ヲ釀セルアリ若シ
平時ニ於テセムニハ必スヤ瑣ニタル一小事トシテ
深ク之ヲ意ニ入セザリシナルベキモ英王政府
ハ之ヲ以テ奇貨居クベシト為シ故ラニ其間
顯ヲ誇張シテ佛國政府ニ嚴談ヲ試ミタリ
是ヨリ先キ仏王政府ハ千八百四十二年九月ヲ
以テタイチー島ヲ其保護王トナセザルが同
島ニ在任セル英人アリツチヤルドナル者アリ宣
教師ニシテ領事ヲ兼ネ又藥舗ヲ開キ其ノ
他尚ホ種々ノ商業ヲ營メリアリチヤルド人
トナリ權詐ニシテ張謀ニ長シ大ニ島ノ女王ホ

マレーニ信用セラレテ威權ヲ專ラシテ遂ニ女王
ヲ勸誘シテ真ノ先キニ仏王水師提督チエプチ
リッパールト俱ニ訂結シタル保護条約ヲ廢棄
セシムルニ至レリチエプチリッパールハ其翌年八百
四十三年十一月再ビタイチー島ニ來リテ此ノ状
況ヲ目撃シ斷然女王ノ位ヲ廢シツシエテ群
島ヲ擧ケテ仏王ノ兵有タルコトヲ宣言セリ然
ルニ仏王政府ハ之レカ爲メ英王ト葛藤ヲ生セ
ムコトヲ恐レテ翌年八百四十四年二月提督ノ
此ノ處置ヲ非認セリト雖ドモタイチーニアル仏
王官吏ハ本王政府ノ訓令ニ接スルニ先キテ既ニ
其政廳ヲ奪ヒ而シテ土人ノ中プリウチルドニ
煽動セラレテ叛亂ヲ起ス者アリシガ故ニ

大佐 パペチーハプリウチヤルドヲ拘引シ且ツ其ノ
数日前ヨリ既ニ領事ノ職ヲ罷メテ外交官ノ
特權ヲ有セザルヲ以テ三月初旬之ヲ島内ヨリ
放逐セリ此ノ變報ハ七月ニ至リテ倫敦ニ達シ
之ト同時ニプリウチヤルドモ亦倫敦ニ歸來シタル
ニ當時英王人ノ憂王心ハ燃ルガ如クプリウチヤ
ルドヲ視ルコト殉教者ヲ視ルニ均シク群衆ハ
競フテ其ノ面ヲ視其ノ聲ヲ聞カムト歎シ之ヲ
扶クルニ更ニ「アングリケン宗ノ熱心ヲ以テシ英王
人民カ仏王ニ對スル敵愾心ハ方ニ其ノ頂上ニ達
コベルト、ピールノ慎重ナルヲ以テスラ尚ホ且ツ下院
ニ於テ「英國ハ甚シク無禮ヲ被ムレリ宜シク
之ニ報ユフ所ナカルベカラズ」ト公言スルニ至

レリ而シテ轉シテ仏國ヲ視ルニ是亦英王ノ恐
喝ヲ冷眼ニ看過スル能ハズシテ人心大ニ激昂シ
倫敦巴里ノ間ニ於ケル論争ハ日ニ益々激烈ヲ
加ヘ八月ノ終ニハ英仏ノ和親全ク破レテ日ナラス
シテ將ニ砲火ノ間ニ相見ムトスルノ勢ヲ呈シタ
リ
此ノ時ニ於テモ ルイ、フィリップハ終始心ヲ平和ヲ
保持スルニ存シ タイチー事件ヲ稱シテ可憂フ
可キ痴事トナリト言ヒ之レガ為メ敢テ英王ト
ノ平和ヲ破フルヲ欲セズ其ノ國論ノ囂々タル
ヲ顧ミズシテ英王ノ要求ヲ容納スルニ決シ
タリ意フニ當時若シ英露ノ間ニ再ビ相結
托セムトスルノ形勢アリテ大ニ ルイ、フィリップ

ノ心ヲ累ハスコトナカワセハ亦英王ニ屈指ス
ルコト悲クハ此ノ如ク速カナルニ至ラザリシナ
ルヘシ然レドモ此ヲ少シク以前(六月)ニ露
帝ハ親シク倫敦ニ到リテ英王女王ヲ訪問シ
お居シテ大ニ歡懐ヲ尽クシタルコトアリ蓋
シ露帝ハ夙トニ仏王ヲ親王政ノ革命ノ聲
息タルヲ傍ミテカメテ英王ニ好懐ヲ表シ由
リテ以テ英仏ニ至リ離間セムト欲スルヤ一日
ニアラズ然レドモ帝ノ當時倫敦ニ在リシハ
別ニ其ノ目的ノ存スル在リ他ナシ英露ニ至
ノ眼蓋ニ由リテ東方問題ヲ安定スルコト是
レナリ蓋シ帝ノ志以テハ英露ニ至リガ
東方ニ於テ一極ノ霸權ヲ争フハ是レ彼身ノ

為メニ其ノ策ノ得タル者ニアラズ若クシ相悞
妄シテ又覇權ヲ分有セムニハトテ玉ノ外務
大臣ネツセルロードハ是ヨリ先キ秘密ノ誓見書ヲ
アベルゲーン卿ニ送り故ラニ睡昧ノ言辭ヲ
用井テ土庫格帝玉ヲ分刻スルノ双方ノ利害
ナルヲ諷シタルコトアリ而シテ後章ニ記スル
ガ如ク子八百五十三年ニ至リテ帝ハ再ビ英
西政府ニ詢ルニ此ノ議ヲ以テシタルモ又ノ為
ルハ兵トナラズ要スルニ此ノ提議ハ又實英露
ニ玉ノ親交ヲ助ケズシテ適ニ之ヲ疎隔スルノ媒
ハトナレリ
然レドモ當時ルイールイリツプハ露帝ノウイソル
宮ヲ來訪セル真意ヲ知ラズ一意ニ仏玉ニ對

シテ英露ニ玉ノ左盟ヲ結フガ為メナリト恩料
ニ而シテ俄キニ千八百四十年ニ於テ英露ニ玉ノ
左盟ノ為メニ既ニ一大痛撃ヲ被ムリタルヲ以テ
大ニ之ヲ恐怖シテ極力又ノ身ヲ妨ケムコト
ヲ計レリ是レ蓋シ自ラ正當ノ權利ヲ保有シ
又且ツ又外交上着々提利ヲ獲タルニ係ラズ頗
ニ首ヲ垂玉西政府ニ屈シテ自聖氏ノ激昂ヲ顧
ミルニ暇アラナリシ所ハナリシナルベシ甘事情狀
ノ如シ故ニルイールイリツプハ八月二十九日ギゾーヲ
シテ公文ヲ英西政府ニ送りテ仏西政府ハ深ク
アリツキヤルドが變ケタル待遇ヲ悔惜スル旨ヲ
告ケシメ九月二日更ニ英西政府ノ要求ニ應
ジテ若干ノ損害賠償金ヲアリツキヤルドニ與

へ今月十のハ多利加王ト俱ニタンゼー条約ヲ
結ビ戰敗ノ馬刺加ハ英王ノ庇護ニ由リテ開
戰前ト至ク全ナル条件ヲ以テ媾和ヲ為ス
コトヲ得ルハ馬刺加領内ニ於テ一塊ノ土
地ダモ得ルコト能ハス又アブテルガデーノ放
逐ニ関シテハ其実行ヲ監督スル能ハザル有
名無実ノ約束ヲ為シタルニ過キズ要スルニ
仏王ノ外交政策ハ一時頗ル其功ヲ奏シタルノ
觀アリシニ係ハラス其結果ハ殆ムト見ルニ足ル
ヘキ者ナリルイリフイリ予及ヒギゾーハ更ニ一
タビ其王ノ体面ヲ辱メテ其身モ亦非常ノ
不人望ヲ買ヒ而モ之ニ由リテ一モ其目約ヲ
達スコトヲ得タリシニアラス何トナレバ英

仏ノ悞帝ハ此ノ時以降一層其成立ヲ困難ナ
ラシメタレバナリ

其ハ 搜查権問題ノ決定

ルイイフイリツプハ務メテ英王トノ交情ヲ温メ
ムト欲シテ八百四十四年十月倫敦及ビウイ
ンソールニ赴キテ英女王ヲ訪問シ而シテ露
帝ノ左地ニ到リテ女王ト會見シ、ヨリ日ヲ
経ルコト未ダ久シカラサルノ故ニ由リ一層日
其訪問ニ莊重ノ禮ヲ尽クシ以テ其英廷ト
ノ交情ノ極メテ深厚ナルヲ表彰セムコトヲ
計レリ彼レ既ニ英王ニ對シテ幾多ノ讓歩
ヲ為シタル後チ更ニ又夕自ヲ徃キテ媾和
英王ニ呈セムト欲スルニ於テハ人皆之

ヲ以テ至大ノ屈辱ナリトナシ 燕禱ハ痛ク又
海辱ヲ忘ル、ノ速カナルヲ攻撃シ而シテ英
王ハ此ノ訪問ニ申リテ頗ル自ら榮トスルノ
念ナキニアラスト 薩ドモ之カ為メ未ダ仏王
ノ好情ヲ喜ブニ及ラズ要スルニ一方ニハルイ
ブイリッ プ女王ヴィクトリアノ間ニ他方ニアベ
ルヂーントギゾートノ間ニ表自シタル深厚
ナル友情ハ遂ニ英佛二國ノ間ニ存スル政治
上ノ紛争ヲ解クコト能ハオリキ
當時二國ノ間ニ横ハレル諸種ノ問題中又
最モ協定ヲ為スニ困難ナル者ハ黒奴賣買
ノ禁止ニ関スル船艦搜查權ノ問題ニ若クハ
ナシ 佛國ニ於テハ議院ニ新步紙ニ人皆口ヲ

極メテ千八百三十一年及ヒ千八百三十三年ノ条
約ヲ廢棄セムコトヲ主張シ而シテ英王及
則チ佛國政府ガ千八百四十一年十一月二十日
ノ條約ニ批准ヲ與ヘザリシヲ怒ミ且ツ他ノ二
條約ヲ廢棄セムト欲スルヲ怒リテ固ヨリ
其要求ヲ容ル、ノ意ナク、ルイ、フイリッ プ
ハ宛モ白刃ヲ其背ニ擬セラレタル者ノ如
ク一步ヲ退クトキハ立口ニ其身ヲ亡ボサ
ザルヲ得ザルノ窮境ニ陥レリ且ツ佛王ハ
タイチー事件ノ失体ノ後チ宜シク一事ノ
以テ其自尊心ヲ慰ムルニ足ル者ナカルベ
カラズ當時五人カ之ヲ貶稱シテ「アリッチ
ヤルド党」ト呼ベル 温和党ノ人士スラ尚ホ且

ツ文然ラムコトヲ希望スル者アリ是ニ於テ
政府ハ前記ノ条約ニ就キテ夙トニ英仏ノ
間ニ締結シタル條約ヲ継續シテ急ニ之ヲ
結了セムコトヲ計レリ而シテ英法政府ハ今
ニ至ルマデ右ラニ依連シテ其談判ノ結了
ヲ遷延セリト雖ドモ甚ヨリ仏國ニ對シテ戰
ヲ一拜カムト歎スルニアラズ又思奴賣買ヲ
廢止スルノ素論ヲ拋棄シタルニアラズ而
シテ其廢止ノ實ヲ舉ケムト欲セバ必スヤ仏
國ノ協賛ヲ獲ザルベカラザルヲ以テ已ムコト
ヲ得ズ其意ニ仏國政府ノ要求ニ應ジテ長年
ノ條約ニ更改ヲ加フルコトヲ議シ再三ノ交
渉ヲ經テ新條約案ヲ協定スルガ爲メ

兩國各々一名ノ委員ヲ指命シ千八百四十
五年三月兩委員ハ倫敦ニ會合シテ協議
ヲ開ケリ其佛國ヨリ出デタル者ハブローグ
リ公ニシテ英國ノ指命シタルハ博士リエシ
トシナリリエシントンハ英國ノ主張ヲ固持
シテ極力抗辨スル所アリシモ佛國委員ハ
頑トシテ毫モ退讓ヲ肯ムセズ五月二十九日
遂ニ下記ノ諸條ヲ決定シテ其談判ノ局
ヲ結ヘリ(一)監視ノ區域ヲ阿非利加ノ東海岸
ニ限ルベキコト(二)英佛二國ハ各々二十六隻ノ
巡邏船ヲ右ノ區域内ニ派遣スベキコト(三)兩
國互ニ搜查ノ權利ヲ使用スルノ約ヲ廢止ス
ルコト(四)實際其施行ヲ中止シタル千八百三

十一年及千八百三十三年ノ条約ハ若シ十年
以内ニ再ヒ之ヲ実施セサルトキハ全ク廢止シ
タル者ト視做スヘキコト以上ハ兩玉ノ意見ヲ
斟酌シテ頗ル穩當ナル調和ヲ遂ケシ者
ナリ然レドモ英王及民ハ之ヲ以テ自玉ノ屈辱
ナリトナシ英王政府ハ其臣民ノ迫ル所トナ
リテ他事ニ関シテ務メテ自玉ノ改革ヲ妨
害シ以テ其怒ヲ報セルコトヲ計レリ

其九

西班牙女王ノ結婚問題
英王政府ガ自玉ノ改革ニ妨害ヲ加ムト欲
シタルハ就中 西班牙ノ方面ニ在リ是ノ時ニ
方リテ自玉政府ハマドリッドニ於テ殆ムド無上
ノ権力ヲ占有シ母后コリトクリステヤンヌハ其

庇護ニ由リテ國政ヲ專ラシ首相ナルブレ
ハ英王外交官ノ陰カニ妨害ヲ加フルニ係ラズ
議會ヲシテ宛モ千八百三十年ニ制定セル自玉憲
法ニ均シキ新憲法ヲ制定セシメタリ是ニ於
テ次キニ來タルベキ重大ノ事件ハ女王イザベ
ル及ヒ其妹 ルイース・フエルナンドノ結婚ニシテ
歐洲列玉ハ皆齟齬シク此問題ニ注目セリ然レ
ドモ中ニ就キ其利害ヲ感スルコト最モ痛
切ナルハ則チ英王ニ玉ニ外ナラズ故ニルイース・フイ
リツハ夙トニ忍ヲ之ニ勞シマリスクリヤンヌハ
屢ニ女王イザベールヲオームールニ妻ハサムコ
トヲ請ヘリト雖ドモルイース・フイリツハ英王
ノ嫌疑ヲ恐レテ其ノ請ヲ辭シ且ツ明カニ

中外ニ向テ其ノ子ヲ西班牙ノ王位ニ即カシ
ナテ政海ノ均勢ヲ紊カスノ意ナキコト宣
言セリ然レドモ彼レハ之ト左時ニイザベールノ夫
タルベキ者ハ宜シクブルボン家ノ親王中ヨリ
選擇セサルベカラズト主張シ之ニ因リテ
仏王政府ヲ西班牙ノブルボン家ニ連結シ以
テ永ク其覇權ヲピレネー山南ニ振ハムコトヲ
計レリ然ルニ英王ノ王室ハ夙ト女王ノ夫アル
べル公ノ從兄弟タルサツクスゴブルノレオポール
公ヲ以テイザベールノ夫タラシナムト欲スルノ
意アリ而シテ英王政府ハ前年レオポール
ノ兄フエルデナン公ガ既ニ葡萄牙ノ女王ヲ娶
レルヲ以テ今若シレオポールヲシテ西班牙ノ女

王ヲ娶ラシムルトキハ由リテ以テ自國ノ勢
カヲマドリッドニ扶植スルコト亦猶ホリスボ
ニ於ケルガ如クナルヲ得ベシト恩料ニ静カ
ニ其時機ノ到ルヲ俟テリ故ニ是ヨリ先キ千
八百四十二年佛國ガ西班牙女王ノ結婚問題ヲ
英國政府ニ提出シ之際シピール内閣ハ佛王
ノ望ムガ如クナール王ノ弟トラパニー伯ヲ女王
ノ夫ニ推薦スルニ盡カスベキヲ約シタルト
左時ニ女王ハ自中ニ夫ヲ選擇スルノ權利
ヲ有シ決シテ仏王ノ室ノタルガ如クブルボン
家ノ親王ノ外ハ之ヲ娶ルベカラストノ制限ニ霸
束セラレベキ者ニアラザルコトヲ抗言セリ是レ
英王政府ガ真言辭ヲ婉曲ニシテ實ハ其行

動ノ自由ヲ保有セムト欲スル者ニシテ是ヨリ後
千幾多ノ事変ヲ鍾由シ仏王ハ西班牙ニ於テ大ニ
信用ヲ加ヘリト雖ドモルイールフイリツプガ能ク其
目的ヲ達スルハ其前途猶ホ甚ダ遠ク加フルニ
壞玉モ亦西班牙女王ノ結婚ニ就キテ別ニ一途ノ考
案ヲ有シ之ヲ実行スルガ為メ英王ト齊シク仏
王ノ意見ニ反對セリ蓋シメテルニツヒハ千八百四
十三年及ヒ千八百四十四年ノ交ニ於テ西班牙ノ
禍亂ヲ鎮定スルノ最良手段ハ結婚ニ由リテ
多年才正當ノ所有ヲ争ヘル事家ヲ一ニ合スルニ
在リト為シドンカルローヲシテ其西班牙ノ王
位ニ即リクノ權利ヲ其子ニ譲リシメ而シテ之
ヲ女王イザベールニ娶ハサムコトヲ主張セリ以

為ヘラク此ノ如クナルトキハ能ク又宿昔ノ
素論タル君位正統肯義勝ヲ得セシムベ
キナリト且ツメテルニツヒハ從來専ラ壞玉ノ勢
カニ屈從シタルナリフルノ王室ヲシテ其西班牙王
トノ結婚ニ由リテ仏王ノ左盟タラシムルヲ好ミ
茲ニ彼レハ仏王ノ提議ニ係ルナリアル王ノ弟ト
ラパニール伯トザベールトノ結婚ニ反對シテ其案
立ヲ妨ケレムコトヲカメリ但ダ彼レノ提議ニ
喜ヒテ左意ヲ表スル者ハ独リ露王ノミニニシ
テ英王ノニ玉ハ到底之ヲ容納スヘキニアラズ
何トナレバドンカルローノ子トイザベールトハ
各々自己ノ權利ヲ有シ各々自己ノ党派ヲ有
シ又各々其政治上ノ肯義ヲ異ニシテ氷炭

相容ル、能ハテラ以テ其結婚ハ宛モ昔日
葡萄牙ニ於テドンミゲルトドナー、マリヤトノ
間ニ結婚ヲ企テタケル時、如ク適ク内亂
ヲ招致スルノ媒人タルニ過キザレバナリ
ルイリーフイリツプハナテルニツヒノ怒ヲ買フヲ
歎セザルヲ以テ敢テ公然テ提議ニ反當ヲ
表スルコトナクシテ當時ブルジエニ
逃レタルドンカルロート俱ニ談おヲ再カシ
メ而シテ自己ニ專ラ英王ノ誘フテ又英王
ニ注意セシメムト欲シ復タ又英王政府ニ
向フテトラパニー伯ヲイザベルノ夫ニ推薦
スルノ議ヲ提出シタルニピール内閣次ヒテ
ルイリーフイリツプハ其公平私ナキヲ表証

セムト欲シ日ナラシメテオーマール公ノ為メニナ
ルプルノ王女ヲ娶ルベキヲ告ケリ然レドモ
彼レニハ尚ホ未婚ノ一男子モパンシエール
アリテ彼レハ夙トニ公ノおメニイザベルノ
妹ルイリースブルナンドヲ娶ラムコトヲ切望セリ
おニ英王政府ハ陽ハニ仏王ニ好意ヲ表スル
ノ色ヲ示シテ其内心ハ益々猜忌ノ念ヲ深
クシ毫モ其企圖ニ協賛ヲ與フルノ意ア
ラザリキ
右ノ如クナルヲ以テ英國政府ハ終始西班牙
ニ於ケル佛國ノ結婚政策ヲ妨害シ佛國政
府ハ千八百四十四年、未ヨリ千八百四十五年
ノ始メニ強リ百方カヲ竭リシトラパニー伯ヲ推

薦セリト雖ドモ西班牙ニ在ル英王ノ間諜ハ
トラパニー伯ガ「ゼシユイツ」派ノ教育ヲ受ケ
テ極メテ頑陋ノ人物タルコトヲ流傳セシメ
シカバ伯ハ西班牙ニ於テ頑ニ其人望ヲ失フ
テ復タ女王ノ夫タル望ニナキニ至リルイ、フイ
リツプモ亦之ヲ奈何トモスルコト能ハズシ
テ更ニイザベールノ從兄弟タルカゲツキス
公及ビセヴイールズノ中ヲシテイザベールヲ娶
ラシナムコトヲ計レリ然レドモ母后マリ
クリスチヤンスハ二人ノ人トナリヲ好マズ而
シテ英王政府亦陰カニ諂ヲ搆ヘテ之ヲ
離間セルヲ以テ妾身ニルイ、フイリツプノ
言ニ從フヲ肯ムセズ且ツマリ、クリスチヤンス

ハ始メヨリイザベールノ結婚ニ由リテ西班牙
ノ為メニ一個強大國ノ援助ヲ得ムト欲スル
ノ意アリ故ニ彼レハイザベールヲルイ、フイリツ
プ一子ニ娶ハサムコトヲ望ナリト雖ドモ
其事ノ成ラサルヲ視テ更ニ望ヲサツクスコブル
ノレオポールニ屬シ仍テ之ニ夤縁シテ英王ノ
保護ニ浴セムコトヲ望ナリ
英國政府ハ絶エテ之ヲ口ニ發スルコトナキモ
其内心ニ於テハ始終レオポール公ヲシテイザベール
女王ノ夫タラシナムコトヲ切望シ子ハ五回十
五年ノ夏女王ヱイクトリアハ父及ビ大臣
僚ヲ伴フテサツクスコブル公領地ヲ訪問シ、
カス帰途善王ハ之ヲ業因河畔ニ迎ヘテ

蓋ムニ之ヲ御覧シムテ英(國)ト曰有曼トノ問ニ
深厚ナル交情ノ極スルヲ明シ而シテ其女王、
健康ヲ祝スルノ演説ニ於テは玉ニ對シ極
メテ無禮ナル言ヲ吐ケリは玉ルイリッ
ハ此ノ極ニ極シテ大ニ之ヲ愛慕シ更ニ一たび首
ヲ英王ニ呈シ辭ヲ卑フシテ女王ノ再ビ
去ヲ訪問セムコトヲ懇請シ、女王ハ其禮ニ
應ジテ九月、川、去、身、訪シアベルギーノ御又
之ニ往ヘリルイリッ、ハ此處見ニ於テ前回
ノ會見ヨリ一層意ヲ用ヒテ女王ヲ禮遇シ卑
辭謙讓百方其懽心ヲ収メムト欲シ英佛
ニ玉ハ在ク其利害ヲ左クセリト稱シニ玉ノ
恨同ハ今日ヨリ急ナルハナリ而シテ又今日ヨリ

去場ナル去アラズト稱シ而シテ西班牙ニ疾
シテハ唯ダ英王政府ノ援ヲ得テイザベル
ヲ「ブールボン」家ノ一人ニ妻ハシ及ビ其妹ルイ
トスラエルナンドヲモンパンシエーニ妻ハサムコト
ヲ歎スルコトヲ告ゲ且ツモンパンシエーズトルイ
トナルナンドトノ結婚ハイザベルノ既ニ婚ヲ結ビ
思フ産シタル後ニ於テスベシト言ヘリ英
王ノ臨大ニハ其言ヲ聞キテ敢テ面ノアタ
リ矣論ヲ唱フルコトナリ必ス其政策ニ協賛
ヲ與フ可キヲ約セリト雖ドモ其内心ニ於テハ
意ヨリルイリッ、フイリッ、言ニ信ヲ措クコトナ
ク又其約ヲ履ミテは玉ノ政策ニ協賛ヲ與
フルノ意ナク女王既ニ川、去、身、見ヲ終リテ倫

敷ニ帰ヘレルノチレオポール公ヲシテイサベルト
婚セムニ益イカヲ尽クシ今年十月公ハ倫敦
ニ来リテ十二月ニ歿マテ之ニ嗣マリ英王政府
ト各般ノ協議ヲ遂ケタルノチ轉シテリスボ
又ニ赴ケリ而シテ当时最上ニ傳フル所ニ據ルニ云
ハリスボ又ヨリ轉シテ西班牙ニ赴キ英王政
府ノ企及スルガ如クイザベルトノ結婚ヲ果サ
ムト欲スル者ナリト言ヘリ是ニ於テ英王政府
ハ英王政府ニ向フテ其^所置ノ總當ナラガハ
誥リ辛ラシテレオポール公ヲシテ葡萄牙ニ
ラシムルコトヲ得タト雖ドモ久シカラズシテ
ルイ、フイリツプモ亦遂ニ英王政府ノ真意ノ
存スル所^カニシメテリスボノ屢バ之ニ警

告セルガ如ク英王ノ協定ハ到底実行スベカラ
ザル空想ニ外ナラサルヲ悟ルコトヲ得タリ夫
レ当時英王ノ外政ハ平和ヲ尚ヒ溫柔ヲ肯トスル
アルチン^卿真局ニ當リ而モギゾーハ尚ホ之ト俱
ニ遂ニ英王ノ左監ヲ再訂スルコト能ハザリシ
トセバ今若シ剛戾ニシテ争ヲ好メルパルニス
トシニシテ再ヒ英王ノ外務ニ長タルコトアラバ
之ヲ奈何グヤ冀望ヲ達スルヲ得ンヤ然ルニ
子ハ至四十五年ノ終末ニ至リテポール内閣ハ
論ノ密カニ抗スルコト能ハスシテ多少自由説
讓歩スル所アリシモ之カ亦ノ毫モ自由説ノ
信用ヲ情取スル餘ハズシテ却テ大ニ保守党
ノ人望ヲ失ヒ既ニ已ニ顛覆ノ新内閣ハ終

始佛國ヲ敵視シテ極力其政策ヲ妨害シ
歐洲列國到ルル如キ革命ノ運動ヲ幫助シ從來
佛ニ心ヲ寄セタル諸國ノ民主黨ヲシテ轉シテ
英國ニ心ヲ寄セシムト欲スル者ナリ果シテ然
ラハ英佛協商ノ遂ニ成立ノ望ナキハ今ヨリ逆
シテ賭ルベキアラズヤ

其十 佛國ノ兩政府及ビ非革命改革

仏王政府既ニ其援ヲ英王ニ仰クノ望ナシト
セバ更ニ之ヲ他王ニ求メサルベカラズルイハ
リツフハ常ニ佛王トノ左派ニ望ヲ屬シ其千
八百三十四年ヨリ千八百四十年ニ亘リテ佛王
ノ權心ヲ收ムルニ何カニカヲ勞シタルカハ既
ニ前章ニ記述シタルカ如シ而シテギゾーモ

亦其君ト均シク心ヲ佛王ノ左派ニ傾ケ屢ハ
メタルニツロガ多年歐洲ニ於テ代表セル非革
命改革ニ漸ク其志ヲ移スノ趣アリ且ニ於テ
國中ノ自由黨ハ大ニ其政策ニ反勞シオデオ
ン、バロー、チエール、ヂエベルゲエー、ド、コーランヌ、
徒ハ代議院ニ於テ議院法ノ改革ヲ唱ヘテ痛
ク之ヲ攻撃シ他ノ一派ニ屬スルルドリエー、ローラ
ンノ以キハ專ラ普通選舉及ヒ共和政ノ設立
ヲ主張シ更ニ他ノ一派ハ勞働者ヲ煽動シテ社
會的革命ヲ起サムト欲シ而シテ其氣息ヲ
鋭メタル過激田教黨ハ此穢ニ乘シ崛起シテ
國民教育ノ權ヲ独占セムコトヲ計レリ政府
ハ宗門ト俱ニ葛藤ヲ生スルヲ欲セザルヲ以テ懸

勲ニ羅馬法王ニ乞フテ些少ノ讓歩ヲナサシ
ナムト欲シタルモ法王ハ唯ダ甘言ヲ以テ羅馬
駐劄ノ佛國大使ロシヲ瞞着シ卒ニ其ノ
乞フ所ヲ許サズ故ヲ以テルイー、フイリツプ及ヒ
別亞等ハ益々攘玉ト、左監ニ心ヲ傾ケ仍テ一
面ニハ之ヲ以テ其民主旨義ト抗争スルノ援
トナシ他、一面ニハ其斡旋ニ由リテ羅馬法王
ノ権心ヲ得ムコトヲボナリ

是ノ時ニ方リテ攘玉モ亦仏玉ト相結托スルノ
意ナキニアラズ蓋シナテルニツヒハ其多年禁
壓シタル革命思想ガ再び歐洲列玉ノ間ニ彌
蔓シテ其爆發將ニ近キニ在ルコトヲ知レリ彼
レノ四邊ニハ人心沸騰シテ日ニ益々恐ルベキノ

勢ヲ示セリ從來沈黙シテ專制ノ羈絆ニ屈
從シタル匈加利ハ今ヤ起リテ其自治ト其自
由ト要求セリボエミヤニ在ル「スラヴ」民族モ亦
起リテ其獨立ヲ唱ヘリ波蘭土ハ再び叛乱
ノ陰謀ヲ企ダテリ若シ夫レ其地ハ攘玉ノ
有ニアラザルモ而モ其力ニ由テ支配セ
ラル、斯域内ニ於キテ之ヲ言ヘバ日有曼ハ予
ハ至四十年ノ事変ハ其切リニ一、其民約大政
府ヲ創立セムコトヲ要求シ既ニ之ニ奮業上
ノ統一ヲ得セシメタル普玉、更ニ之ニ政治上
ノ統一ヲ得セシメナムト欲シ多年強壓ヲ受
ケタル議院政ノ思想ハ聯邦中到ル處ニ勃
興シテ君羊民ハ所在ニ蜂起シ千八百四十五年

八月索遜云、於テハ之レガ為ノ遂ニ一大騷亂ヲ惹起スルニ至レリ而シテ普王フレテリクギ
ルオーム四五ハ稟性頗ル野心ニ富ミ其素論ハ封建ノ旧制ヲ株守スルニ在ルニ係ラズ日耳曼
王民一般ノ意向ヲ觀察シ之ニ由リテ自ラ利スル所アラムト欲シ其輔弼グンセン及ビラドウィツ
ノ勸告ヲ容レテニツヒ、懇請ヲ斥ケテ其臣民ノ為ニ憲法ヲ制定セムコトヲ計レリ
將タ日耳曼ノ南西ニ在ル瑞西ニ於テハ予ハ至四十五年三月内亂ノ禍ヒ起リ新教ノ州
ハ兵ヲ發シテ旧教ノ州ニ迄リ之ヲシテ「セジエ
イツト」教徒ヲ放逐セシメト欲シ王民ノ多
數ハ其聯邦制改メ改革シテ一層民主的

ニシテ一層統一約ノモノヲラシメナムコトヲ
請求セリ更ニ轉シテ伊太利ヲ視ルニ其王民
ハ比隣ノ形勢ニ刺激セラレテ亦大ニ独立ノ
思想ヲ發揮シ其呼ビテ曰野蠻人トナセル
權王ノ羈絆ヲ脱セムト欲シ日夜更時機
ノ到ルヲ察テリ四圍ノ形勢既ニ此ノ如シ
メテルニツヒカ内心深ク之ヲ憂慮シ王民ト
合同シテ其危變ニ備ヘムト欲シタルハ良
トニ其以ナクムバアラス彼レ以為ヘラク
佛國果シテ墮國ニ合同シ而シテ露國亦遙
カニ之ニ應スルトキハ諸國ノ革命黨ヲ勦絶
スルハ易ハタルノミト是ニ於テ維納政府ハ百
方手段ヲ盡クシテ佛國政府ヲ誘ヒ以テ之

ヲシテ自國ノ政策ニ賛同セシムコトヲ計
レリ然レドモ畢竟スルニ是レモ亦實行スベカ
ラザル空想ニ外ナラス何トナレハ千八百三十
年ノ革命ヨリ出デタル佛國ノ王室ニシテ填
國ノ代表セル神聖同盟ニ合同シ之ト其政策
ヲ一ニシ其運動ヲ共ニセムコトハ情理ノ齊シ
ク許サザル所ニシテ兩者ノ間ニハ常ニ氷釋
スベカラザル一種猜疑心ヲ存シメテルニツヒ
ギゾートハ到底肝膽ヲ披キテ相語ルコ
ト能クハズ若シ二者交ニ一切ノ務心ヲ去リ
テ親交ヲ結フコトアラバ是レ適ニ其國ヲ
危クシ其身ヲセボス所以ナレバナリ

